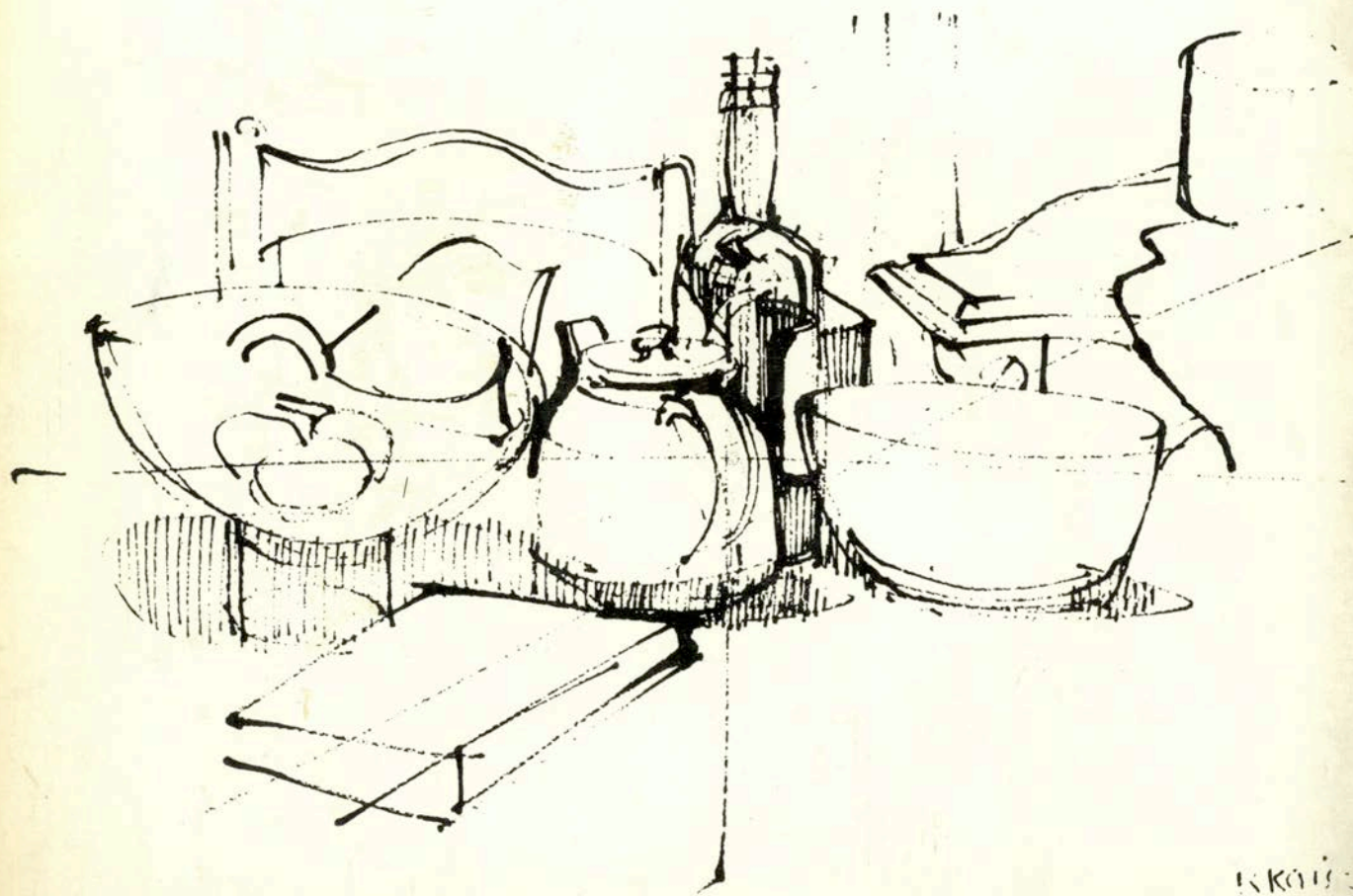


月刊「神戸っ子」昭和39年3月10日印刷通巻36号 昭和39年3月10日発行 毎月1回10日発行

郷土を愛する人々の雑誌

# 神戸っ子

3月号



KKATO

monthly magazine kobekko march 1964 no, 36

コンテッサノール株式会社

7651



■コンテッサノールノーのご用命は神戸日野モーターへ TEL④5771~5■



これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ


これは神戸っ子の心の手帖です



*Mikimoto Pearls*



永遠の気品、ミキモトパール。みがきぬかれた細工技術と  
香り高い芸術性は、海外でも高く評価されています。ミキ  
モトは権威と信望を集めた世界の宝石店です。

ミキモトパール  御木本真珠店

神戸店＝三宮・神戸国際会館

Tel. 22-0062

大阪店＝堂島・新大ビル

Tel. 361-0220



われら  
神戸っ子

1

辻 久子

バイオリニスト  
相愛音楽大学教授

公演、勉強の繰返しで、ほんとに暇がありません。それに関西にいる時は弟子の稽古もしなければならぬし、むしろ旅に出て「どうも固いネ」「力を抜いて自然に……そう」と、お弟子さんの稽古もなかなか厳しい、音の世界にはいると辻さんの表情は、生きいきと冴えてくる。

（御影の自宅で）

撮影 / 西村雅司



確信をもって  
タジマの目が選んだ  
世界の宝石の名品！



W. G. 天然ルビー  
ブローチ  
イタリア製

*Tajima*  
宝飾店 **タジマ**

元町2・TEL ③0387・2552



われら  
神戸っ子

2

坂口千雄

川崎興産株式会社  
専務取締役

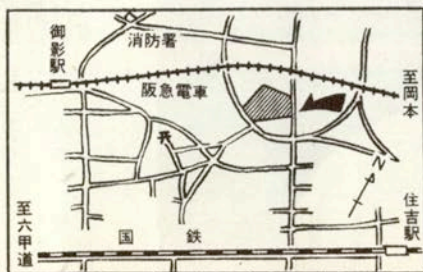
趣味はと言われると困るが、今は歌舞伎だと言うことにしている。団十郎の襲名披露の公演も東京まで観にいったし……と言われる坂口さんは全くの万能選手、柔道は二段、囲碁二段、陸上競技も詳しい。しかしビリヤードは43年の球歴をもって、いまも5本250の腕前「若い頃は300ぐらいは突いたが」と言われるが、キューさばきは、聊かの衰えも見えない。

〈三宮・日の出撞球場〉

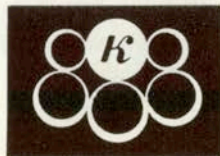
撮影 / 西村雅司







# Kaneko Pearls



金子真珠

輸出専門の金子真珠の新社屋が六甲山麓の住宅地御影に竣工いたしました。絶対の信頼をいたゞいて、いる金子の真珠を生産地から直接皆様にご販売出来ます。どうぞ遠慮なくお立寄下さい。

神戸市東灘区住吉町堂ノ本 1824  
TEL (85) 2628・9422

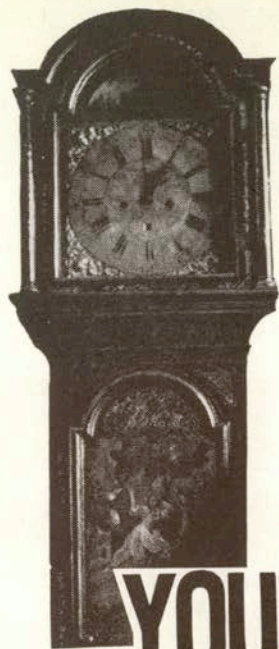


## 3月号目次



- 1 SECOND COVER / 絵・中西 勝
- 3 グラビヤ/われら神戸っ子①・辻 久子  
われら神戸っ子② 坂口干雄/カメラ 西村雅司
- 8 わたしの意見/金井兵庫県知事
- 10 随想三題/神戸の青春・別車博資  
みどりの袴で元ブラ・草笛美子  
わが青春寮歌と野球・直木太一郎
- 14 随想/雲中小学校卒業生名簿・田宮虎彦
- 18 連載随想第十九回  
鬼々怪会のことなど/白川 渥
- 20 座談会/ブレーン都市を目指せ!  
広瀬久重・吉林幸男・内山省吾・牛尾吉朗
- 24 経済ポケットジャーナル
- 27 連載第十二回(最終回)/神戸とエトランゼ  
夢かうつつか青い目の68年。一・陳舜臣
- 32 映画のこと手当たり次第①/淀川長治
- 34 香港情報/小川丑郎
- 37 季節のモード/春の帽子・福富芳美
- 43 暮しのバラエティ①/おしゃれな眼鏡
- 46 座談会/兵庫文壇はいま花ざかり  
田辺聖子・陳 舜臣・足立巻一・青木重雄・森木正一  
安水稔和・赤尾兜子
- 52 ピンクコーナー/(T)
- 55 神戸遊戯誌7/ビリアード①・青木重雄
- 58 神戸うまいもん巡礼 No. 19/赤尾兜子
- 60 紳士入門③/紳士文章作法・竹田洋太郎
- 62 ポケットジャーナル
- 64 KOBEKKO SHOPPING GUIDE
- 70 連載第11回/神戸夫人・武田繁太郎
- 74 愛読者コーナー・神戸っ子ごあんない
- 76 グラビヤ/猿さん神戸の街をゆく/カメラ 緒方しげを

表紙・小磯良平/カメラ・米田定蔵/デザイン・橘 昭三



**YOUNG  
CLASSIC**

for the young and  
thg young-at-heart

男の服飾

**マツダ**

三宮本店	神戸センター街 TEL ☎ 0895
トアロード店	センター街西口 TEL ☎ 0896
新聞地店	新聞地本通り TEL ☎ 7688
姫路店	姫路駅デパート TEL ☎ 1261

**Fachrein's**

ドイツ菓子

ピラミッド  
ビスケット  
各種ケーキ

**ユーハイム**

本店・三宮生田神社西隣  
神戸そごう・神戸三越・国際名菓店



＊わたしの意見

# 神戸の文化を 盛り上げよう

金井元彦 兵庫県知事



――県民に明るい話題を提供して喜ばれているのは、やはり、のじぎく賞ですが、知事のお考えはいかがですか――  
「のじぎく賞は、小さな善行をたたえて、その善意を奨励しようと言うのでネ。県民の皆様にかわって、善行に気軽な有難い言うものなんです。そして、あまりやかましく言わないで、皆んなが心の中にもっている善意を行動に現わしていただくと言うものです。元来、外国人にくらべて日本人は照れ性だから、判っていてもなかなか行動に移さないところがあるんです。だから善行のムードをたかめることは必要だと思いますよ。」  
――金井知事は文化にはご関心が深いそうですが、兵庫県としては文化に対する行政はいかがですか――  
「兵庫県としては、芸術祭を毎年開催しており、県民市民がよい芸術に、より親しめる機会をもちたいと考えていますので、各方面から意見を寄せていただきたいものです。今年度は古文化の保存にも力を注ぎたいと思って、若干の予算も計上していますが、特に文化財としての建物、仏像などの保存、埋蔵文化の調査保存などを再検討して見るつもりです。それに旧跡などの扱いも考えて見ます。例えば、源平合戦の旧跡、松風村雨、求女塚などの遺跡の扱い方がお粗末なのでね。ローマなどでは、古代の遺跡などが非常に大切に保存され、現代の文化と混然一体となって見事に生かされていますよ」

――金井知事は神戸っ子なんですが、神戸っ子として、現在の神戸にのぞまれることは――

「神戸がもう少し、パリッとしてほしいね。何かしら以前の清潔さがないように思うし、活気もない。むかしは神戸は先端的なところがあったと思う。これは、神戸人としては考えなければならぬところだな。私は神戸は文化をもっと盛り上げねばと思いますよ。大都市に人が集るのは、文化・教育の程度が高いからなので、その土地の繁栄には欠かすことの出来ないことだと考えています」

# 随想三題



資 博 車 別 カット

## 神戸と青春

### 別 車 博 資

地元神戸では全く久しぶりの個展を大丸で開催中である。昭和初期からしばしば開いた個展も、十四年に元町カネボウ開店祝いに同店の依頼で開いたのが戦前の最後であった。戦後は一層画筆に励むくせに個展を怠っていたと言える。それだけにこの度の個展には力が入り、著名な知友方から「別車博資の人と作品」紹介のために親愛のあふれた「推薦の言葉」を寄せてもらった。そのなかに朝倉斯道先生の「今昔の感がある」との

ことば、今昔と申されたのは、その昔、昭和初期の私の第一回個展（神戸画廊）に際し紹介文を書いていたからだである。

当時の朝倉先生は朝日新聞神戸支局長時代で美術記者を兼ね、その美術評論は「朝日」の紙価を高くしたものである。又各紙も競うて美術欄を賑わし、県下洋画壇は飛躍する。

画家の集り交友も繁くなり、あちら、こちらの酒場や喫茶店で気焰を上げたことは今の若い画家連中より盛んであったかもしれない。

港祭りの初期には仮装して元氣にねり歩いたり、その稚氣は時に三宮駅から須磨まで一等車にのり須磨寺の花見にくり出したりした各社のジャーナリスト、しゅう家、ファンも合同であった。

又夏の須磨海岸に集まって遊んだ時は坂本益夫氏とまわしをしめて双方十二貫五百（四七キロ）の骨体美を競ったし、当時誰れもが朝閑（ちようかん）と愛称した朝倉先生を仁木弾正の床下のどぶねずみと見立てて足で踏まえ、男之助の身振りよろしく先代高島屋ばりのせりふをうなった記憶もある。も少し前の時代、大正十年には神戸でもミルクホールが高級化して喫茶店が出きはじめていて、元町六丁目の薬局三星堂の二階の喫

茶室は日本的に有名になったが、あの附近に新聞社がかたまっていたので若い記者達の常連が多かった。時には小個展が開られ、私も列べたことがある。

このお茶やコーヒーの値段は一般の三倍の十五銭であったがいくらでもおかわりをくれた。ここを振出しに元ブラをして大丸前のブラジレイロに入るのが私達仲間の日課の時代であった。このコーヒー店の奥がソシャルダンスホールで、ここから神戸のモダンボーイが育った。話に興がつかないと、南京町の焼そばで腹ごしらえをして、更に布引まで歩き、ブラックエンドホワイトなるスナックバーを訪ねた。下戸の私はここでもコーヒーであったが、東京のコーヒー党を案内すると、そのふんいきその味と十銭の安さに驚きながら神戸をほめてくれた。

アルコール党は加納町二のバーアカデミー、福原のスワロー、大丸前のおでん屋たぬきが歴訪先きであった。（洋画家）

## みどりの袴で 元ブラ

### 草 笛 美 子

昭和七、八年の頃でしょうか、まだ私が宝塚歌劇団の生徒の頃。



緑の袴に、銘仙の袂の着物、黒く長い髪はひつつめて三つ編み。その耳許に真紅のバラの花をつけ小さな櫛をかざし、ちよつと気取ったおしゃれのつもりで、草路潤子さん、寿三千代さんといった仲好しと、舞台のあい間に神戸へ遊びに行くのが何よりの楽しみでした。

まず、大丸前の「ミサワ」という舶来品の趣味の店で、舞台用のアクセサリーを買って、次が元ブラです。「高砂屋」のきんつばを15個は平らげましたし、関学ボーイのたまり場「本庄」でお茶を飲み、「紅葉軒」の大きくて美味しいピフテキを食べ、とにかく頂くお給料の全部が、食い気一方で消え失せるという有様でした。どうしてあんなに食い気があったのかしらと考えていましたら、その頃の大劇場はマイク設備など全然なく、ありったけの声を張りあげて歌っていました。その上飛んだり跳ねたりですから無理もありません。それから新開地の松竹座にも洋画キチガイでよく通いました。

「我はトウランドットなり、あでに咲く牡丹の花か、あゝ我が姿、永遠に永遠に美しく咲け……」と歌いながら40段の階段を裾をひき侍女にかしずれて登場する「トウランドット姫」を演じた時。ニキビ華やかな頃に、類いまれなる姫

君を演じる辛さは、並大抵でなく、客席の方には悟られなくても「今日の姫君は、ずい分大きなオデキがあるわア」と周りに冷かされ、毎日鏡を恨めしくにらんでいたものです。

白井鉄造先生の「ミュージカルアルバム」で、それ迄の宝塚にはなかった大人っぽい外国の酒場女の役があてられました。真赤なネツカチーフに黒ビロードのドレスで、セーヌの岸辺に立ち、ガス灯の下で煙草をくゆらせ、暗い過去を低音でダミア風に乗歌うのです。一本の煙草を吸い終った時「アルミタ」の唄も終りを告げます。当時としては非常に思い切った舞台で大変な人気でした。私も初めてパーマをかけ、あの役に一生懸命になりました。ほんとに忘れられない思い出の舞台です。

その頃、共に声楽専科だったエツチンタツチンこと、橘薫、三浦時子さんのコンビにはよく引き立てて下さいましたし、相手役の男装の麗人には、小夜福子、芦原邦子、奈良三也子さんなど、又いまた文学座にいらつしやる南美江さんが美空曉子といって男役でマダム族に大変人気がありました。熱烈なファンもとても純情で、たまに楽屋に逢いたいと来て下さってもどちらものも言えないで、顔を赤らめてモジモジしていたもので

す。昭和十四年にはアメリカ巡演もあり、レビューの全盛でした。若くても好きな道だったので、少々貧乏しても、良い歌を唄えばいいという芸術家の誇りを持って胸を張っていたようです。私の青春は夢多いロマンチックな時代でした。そして神戸の町も良き時代でした。

今はその好きな神戸の元町で、「紅梅」という店を開いています。その頃のファンの方も良く訪ねて下さって、懐しいタカラヅカの唄に店が湧き立つこともあります。(元宝塚スター)

## わが青春 寮歌と野球

直木太一郎

その頃神戸駅前にあった「相生町の三つ輪」は毎年三月一日には造化の桜で飾られ椅子をさかさにして紙をはって行燈のように火がともされたが、これはその日に例年神戸一高会がここで開られるためであった。女人禁制がこの日だけ解かれた母校一高の記念祭を偲んで古くから行われて来たしきたりであった。

小泉良助先輩から「お前やれ」と言われてこの会の幹事を引受けしたのは、昭和の初年で、それから

川崎芳熊と二人で戦争になるまでの長い間を幹事としてつとめたのである。歴代の兵庫県知事も湯沢三千男、白根竹介、小柳牧衛、坂千秋など皆会員であった。「普通神様」と言われて颯爽たる乗馬姿で知られていた今井嘉幸博士もそうであった。久米孝蔵、徳岡英などはその頃からの生き残りである。

日本郵船の大会議で名を知られていた勝山勝司もこの金の常連でいつも「私の居た頃は正に一高の黄金時代であった」と広言していたが、之に対し川崎芳熊幹事はいつも「先輩の頃はあゝ玉杯や春爛漫の如き寮歌の黄金時代に過ぎないが、われわれの頃はサウスボーイ慶村投手の怪腕がよく早稲田、慶応、学習院、三高をいずれもスコルクで一蹴し去った実に野球の黄金時代であった」と遠慮なく挑んでいた。

寮歌と野球、これがその頃の私たちの青春の中心を占めるものであった。

日本の野球の草分けの一人青井鉞男も神戸一高会へ出て来て「エール大学の選手ストレージが組織的な野球を日本へ伝えたのは明治七年であったと言われているが、自分が第一高等中学校で野球をやったのは明治廿七年で初代投手が岩岡博士で自分は三代目であっ

た。その頃横浜のストーンと言う人から野球の正式の規則書を貰って読んでみるとそれ迄やっていたことは多く反則であったと言う笑い話もある」と話している。

「勝ったがえい。勝ったがえい。勝った方がえい。」と言うエールは野球の応援で太鼓の響、白旗の波といっしょにいつも叫ばれていたがその通り勝って勝って勝ちまくったのは大正七年の一高野球部で川崎芳熊幹事や私の居た野球の黄金時代であった。

「あゝ玉杯」は矢野勘治の作で彼は勝山勝司と寮の同室であった「矢野は寝室で蒲団をかぶってローソクの明りでそれを書いていたが、はじめ『玉の杯花浮べ、緑の酒に月宿し』であったが、力弱いと言うので作曲の時変えられた」と言う。勝山勝司は更に「緑もぞ濃き」をいたく推奨し「これは芝碩文の作詞で俳趣に富んでいる」と言ったが「あゝ玉杯」と共に楠正一の作曲でこれらは今尚名曲とされている。楠正一は実に青年歌の作曲の天才であった。「春爛漫」も作詞は矢野勘治だが作曲したのは豊原雄太郎であった。彼も又神戸一高会へ出て来て自分の作曲通りそれを歌って聞かせたが、優美で繊細で私らが歌っていたようなものではなかった。これらは当時のインテリ女性であった女学

生や看護婦らの間でも愛唱されて、病院や女学校の寄宿舎の窓にしてこのメロディの流れ出ていない所は少なかったと言われたものである。

神戸一高会が遠来の多くの先輩連を常盤花壇に迎えるに当って「あゝ玉杯」「春爛漫」に花柳芳五郎の振付を頼み、花隈の若手連が紺がすり袴姿の一高生徒となってボートレース踊りを見せて喝采を博したが、其時柏の徽章のついた制帽が楠公前の店で手に入ったと言うので驚いた。これは当時神戸一中から毎年一高へ三十人以上が大量入学していて、受験生の間でカーキ色の制服制帽が大いに幅を利かせていた時代であったからであろう。

「あゝ玉杯」「春爛漫」を三味線にのせるため日銀支店長の柳田誠二郎が連日花隈へ出張して教授したが、「鳥は囀り蝶は舞い」というところが何度やっても三味線にのらず姐さん連中が大汗をかいたと言うし、歌詞を渡された彼女らが「魍魎魍魎」が読めず、検番の物知りが辞典をかかえて走り廻ったと伝えられている。

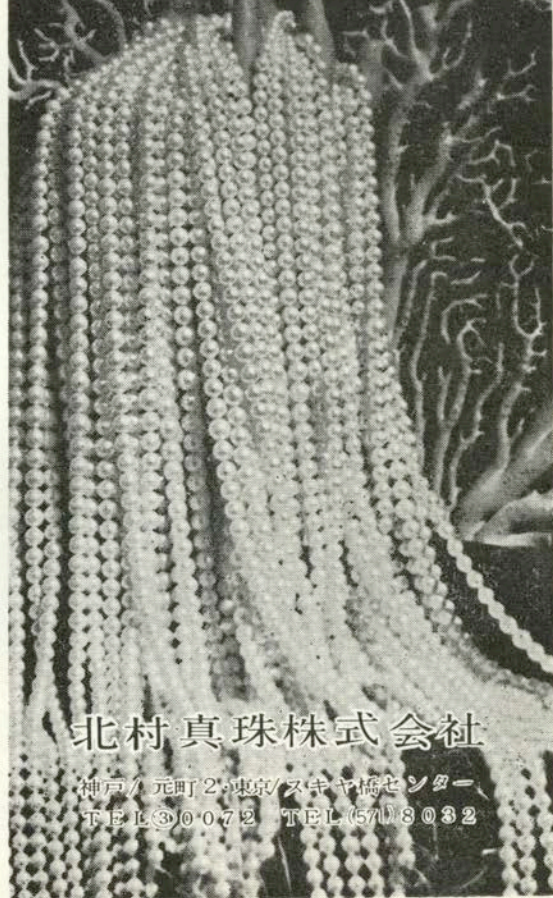
(神港倉庫KK社長)





KITAMURA PEARLS

世界の人々に愛される  
キタムラパール



北村真珠株式会社

神戸 / 元町2 / 東京 / スキヤ橋センター  
TEL ③0072 TEL (57)8032

世界中の人からほめられた

日本の誇り 神戸のほまれ

# マロングラツセは ヒロタの銘菓

元町通三丁目 TEL ③二三四〇番